

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24330203

研究課題名(和文) 児童養護施設入所児に見られる諸問題の成因に関する研究

研究課題名(英文) A Study of the origin of institutionalized children's characteristics and problems in Japan.

研究代表者

森 茂起 (MORI, SHIGEYUKI)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：00174368

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 15,100,000円

研究成果の概要(和文)：児童養護施設で暮らす子どもの諸問題の成因を明らかにするため、入所前の育ち環境、施設の子育ち環境を評価する試みを行った。そのため、施設の成育環境を評価する手法を開発した。後の国際比較、家庭環境との比較も考え、海外で開発された家庭養育環境評価尺度、Home Observation for Measurement of Environment (HOME)の前思春期版に基づき、施設養育環境評価尺度の日本語版を作成し、施設環境の評価を行った。その結果から、施設の制度よりもHOMEで測定される環境要素が成長に影響しているなどの結果が得られた。

研究成果の概要(英文)：This study conducted a large scale survey on institutionalized Japanese adolescents, who have experienced a range of Childhood Adversities (CAs) before their placement. The aim of the survey was to identify CAs' associations with children's symptomatology as well as cognitive and social characteristics. The institutions' environment for children was also evaluated by a newly developed version of HOME (Home Observation for Measurement of the Environment) for institutionalized children. The data analysis is still under the process but temporal results suggest that there is no HOME score difference between institutions of different sizes meaning qualitative differences between institutions under the same system. Another analysis suggests that the CAs is classified into 4 categories: parental abuse, parental psychosocial risks, parental absence, parental neglect, providing a platform to look into their effects on children's well-being.

研究分野：臨床心理学・児童福祉学

キーワード：社会的養護 児童養護施設 子どもの心理的・社会的・行動的問題 子育ち環境 子育ち環境評価 (HOME) 逆境体験

1. 研究開始当初の背景

次世代育成の営みにおいて、家庭がその役割を果たせない時、社会が責任を担わねばならない。子ども虐待の予防から一般的な子育て支援まで、社会の手による子ども・子育て支援の必要性がますます高まっていた。そのなかで、家庭における養育に困難を抱え、特に支援を必要とする子どもに、質の高い社会的養護を提供する方策が求められていた。

多くの先進国では、児童養護施設制度の廃止が行われ、里親制度の充実が進む一方で、わが国は先進国の中では珍しく、集団養育（児童養護施設）を社会的養護の軸として発展してきた。しかし、近年では、里親制度の拡充が行われるとともに、施設養育においても、「家庭的養育」の重要性が認識され、小規模化が進められてきた。

しかし、そうした議論の根拠に置かれていたのは、西欧の研究者による研究であり、その多くは、いわゆる「施設病 hospitalism」の概念とともに施設養育の問題が認識された時期の研究や、ルーマニア研究のような劣悪な施設養育の問題性を明らかにした研究であり、日本のような経済発展国における施設養育に関するデータは少ないのが実態であった。

わが国における施設児や児童養護施設に関する研究は、発達や精神病理に関する疫学的研究と、現状改善を図る介入プログラムの開発やその効果を測る研究に大別され、それぞれの報告が蓄積されていた。しかし、施設の養育環境を実証的に検討する研究や、施設児の呈する諸問題の成因に関する研究が少なく、さらに養育環境と個人内要因を組み合わせ検討している研究はほとんど見あたらなかった。わが国における養護施設や施設児に関する研究が、なお不足していると思われる。

海外においても、施設に暮らす子どもの諸問題の成因に関する研究が存在したが、措置理由となる環境的・気質的背景が施設児の諸問題の源という見解と、親密性・個人性・感性に欠けた養育等の施設養育の一般的問題点が主因であるという見解の両者が存在し、施設児の発達に影響を及ぼす諸要因が十分明確にならないまま現在に至っていた。

日本の児童養護施設における研究は、国内の子どもの健康な成育、成長を実現するためだけでなく、世界における子どもの代替養育のあり方を考える上で貴重なデータを提供すると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、児童養護施設で暮らす子どもたちが抱える諸問題とともに、個人的な背景要因と施設的环境要因の両者を測定することで、それら諸問題の成因を明らかにすることである。また、施設的环境要因を多元的に評価する手法が存在しないことから、家庭環境の評価に使われている評価技法、

Home Observation for Measurement of the Environment (HOME)の児童養護施設版を作成し、今後の社会的養護研究の基礎技法を提供することも目的とする。

3. 研究の方法

(1) 研究体制の構築

全研究期間にわたり、児童養護施設の全体的協力を必要とするため、甲南大学の所属する研究員が持つ兵庫県児童養護施設協議会との連携を中核として、筑波大学の研究員が持つ関東地域の児童養護施設との連携関係を合わせて研究体制を築いた。

兵庫県においては、全施設から調査に関わる委員を選定し、研究グループを構成した。そのうち、施設における調査の受け入れ準備等を担当する委員と、他施設の訪問による調査の実施に携わる委員に分かれ、後者は、調査方法の研修を経て、科研メンバー及び大学院生とペアを組んで実施に当たった。

これらの過程は、児童養護施設的环境および子どもの状態に対する職員の理解を深めるとともに、施設長も含む施設全体に対して、実証的なデータに基づいて養護実践を行う姿勢を浸透させる過程でもあった。

(2) HOME 児童養護施設版の作成および施設環境の評価

HOME は乳児版、幼児版の日本語版が存在するが、本研究が対象とする思春期前期を対象とする HOME には日本語版が存在しない。また、原版の HOME 思春期前期版は家庭を対象とするものであり、施設養育を対象にしたものではない。そこで、HOME 思春期前期版を翻訳した上で、児童養護施設で使用するために必要な修正を加え、児童養護施設のための HOME 思春期前期版を作成した。

作成にあたっては、家庭版 HOME との対応関係を保ちながら児童養護施設の実態を反映できるものにするため、児童養護施設職員との共同で項目検討、試行版作成、実施、改訂の作業を繰り返した。

具体的には、2012年に思春期前期版 HOME の翻訳を行い、バックトランスレーションを経て、施設職員の見解、原著者 Dr. Bradley との協議も経て作成した試行版を、2013年に実施した。それと並行して、2014年にかけて、「実施マニュアル」を作成、試行版の実施経験に基づき改訂した暫定完成版を2014年に本格実施した。その結果を踏まえて、尺度、実施法にさらに修正を加え、完成版を作成した。

(3) 子どもの背景および諸問題の評価

子どもの背景を把握するための職員記入の調査様式と、子どもの状態を把握するための自記式質問紙を用いた。前者は本研究のために新たに作成したものである。

背景要因には、施設入所年齢、入所期間等の基本情報の他、入所前の逆境的体験に関する

るチェックリストへ、記録および職員が直接得た情報の両者に基づく記入を求めた。チェックリストには、入所理由チェックリスト、家族背景チェックリスト（貧困、精神疾患、犯罪歴）、不適切な養育チェックリスト（4種の虐待）が用いられた。

子どもの状態把握には、外的および内的症候を把握するための、養育者記入によるSDQ (Parent rating Strength and Difficulties Questionnaire)、自記式の自己効力感尺度 (PSCS-C: Perceived Self-Competency Scale for Children) 等が用いられた。

また、研究期間最終期において、対人認知に影響を与える認知特性を把握するための実験的手法を合わせて導入した。近年子どもの認知特性に関する研究が進み、子どもの諸問題の背景にあると考えられるようになっているからである。

(4) 実施の手続きおよび進行

調査の実施においては、子どもに負担をかけることなくかつ多数の子どもに実施するため、HOME インタビューと質問紙記入を合わせて60程度で終了する手続きを構成して実施した。

調査は、2013年に第1回調査を行い、2014年に第2回調査、2015年度末から2016年度始めにかけて、認知特性を測定する実験的手法を加えた調査を行った。

4. 研究成果

(1) HOME 児童養護施設版作成

方法の項に記した作成過程を経て、2015年に完成版に至った。完成版に基づく、『思春期前期 HOME 評価尺度実施マニュアル（養護施設版）』を、甲南大学人間科学研究所より2016年に発行した。HOME様式を完成したことは本研究の大きな成果であり、今後、多くの研究、実践での使用が期待できる。

ただし、尺度の標準化にはデータ数が不足していたため、他研究チームが2015年、2016年に実施したデータと合わせて標準化する作業が残された。この作業は進行中である（2017年6月現在）。

思春期前期版の完成を踏まえ、施設のための児童期版、および、里親家庭版の作成が今後必要期待される。

(2) データ分析に見る暫定的結果

今研究の目的である、子どもの諸問題の成因としての、入所前の子どもの諸条件および施設の成育環境の検討については、2016年より本格的にデータ分析を実施し、論文を学術誌に投稿中である。そのため、公表された結果としてここに記すことができない。ここでは、分析過程から見えるいくつかの論点と今後の課題を記す。

HOMEのデータによる分析では、まず、大舎、中舎、小舎、地域小規模、グループホームといった施設形態とHOMEで評価され

る成育環境との関係が検討課題となる。現在、家庭的養育の推進の一環として、生活単位が人数の上でも空間の上でも小規模化され、家庭の環境に近い児童養護施設が増加している。そうした小規模化は、HOMEで測定される諸要素（「物理的環境」「学習環境」「モデリング」「自立の促進」「管理機能」「家族機能」「受容性」）にどのような変化をもたらすのであろうか。その検討は、「小規模化」「家庭的養育」といった実践を構成する要素を、より実証的に確認することを可能にするだろう。

暫定的な結果では、大・中・小舎の間にHOME得点の差が見られず、同制度の施設間や同施設内の個人間のばらつきの方が大きい。また、質問紙調査の結果に見られた子どもの状態も、施設形態よりHOMEで評価された環境要素に関係していた。ただし、今回の調査時にはグループホーム等の小規模施設の数はまだ少なかったため、今後そうした新制度に基づく小規模施設の環境を評価していく必要がある。

入所前の家庭背景と現在の子どもの状況の関係を検討する際、背景情報の数値化自体に課題がある。不適切な要因（広義の虐待）の分類として用いられている、身体的虐待、心理的虐待、性的虐待、ネグレクト以外に、貧困、犯罪歴等の家庭背景あるいは親自身の問題などのデータが得られているが、それらのどれが問題の成因として意味を持つか自体が、本研究の検討課題である。そこで、今回の調査で用いたチェックリストへの回答を成因分析したところ、「虐待」「ネグレクト」「親の社会-心理的問題（貧困、犯罪歴、精神疾患等）」「親の不在」の4カテゴリーによる分析が最も問題の成因をよく説明するという結果が得られている。そして、このうち、「親の不在」は、現在までの分析では、子どもの問題との関係が見られていない。また、過去の研究と一致する結果として、虐待とネグレクトが子どもに与える作用は異なるように思われる。これらの問題に関するさらなる詳細な分析は今後の課題である。こうした知見は、成因の理解を深めるだけでなく、子どもの入所前背景を把握するための評価様式を提供するものである。

以上の暫定的知見の論文化が現在の課題である。それらも含め、研究期間に得たデータを精緻に分析し、HOMEで評価される施設環境、入所前環境、現在の子どもの状態の関係を検討する作業が今後に残されている。

(3) 成果の社会的還元

本研究の進行とともに、学会等の機会に、発表やシンポジウム企画を通して、本研究の意義と進行状況を公表してきた。代表的なものに、ISPCAN(国際子ども虐待防止学会,名古屋,2014)、JaSPCAN(日本子ども虐待防止学会,大阪,2016)がある。それらの企画は、家庭的養育が求められる現在、成育環境

としての施設環境をあらためて見直すことを目指した。家庭的養育という言葉が意味するものを、要素的に検討することで、施設養育と家庭養育を同じ視点で検討し、それぞれの質を向上させることが今後の課題となる。そのためには、今後、研究対象を里親家庭にまで拡大することも必要である。本研究によって、そうした展開の基礎が築かれたと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 10 件)

森茂起, 人生史の共有を目指して: 自伝的記憶に焦点を当てた虐待臨床. 子どもの虐待とネグレクト, 18, 3, 318-326, 2016.

森茂起, 心の基盤に困難を抱える子どもへの心理的援助を考える: 人生史への関わりから見た施設養護臨床. 精神分析的心理療法フォーラム, 4, 58-63, 2016

海野千畝子, 虐待を受けた子どもへの EMDR, 動物介在療法を活用して, 児童青年精神医学とその近接領域, 57(1), 7-24, 2016.

北川恵・岩本沙耶佳 アタッチメントに焦点づけた親子関係支援の実践と親子の変化、心の危機と臨床の知, 16, 93-104, 2015.

Anne T, et.al. Validating the Effects of Inclusive Childcare with the Interaction Rating Scale, Education, 4(2), 35-40, 2014. 査読有.

田中究, PTSDの病態と診断—DSM-5 における児童期 PTSD 診断. 友田明美、杉山登志郎、谷池雅子編集: 子どもの PTSD-診断と治療、診断と治療社、12-19, 2014.

北川恵. アタッチメント理論に基づく親子関係支援の基礎と臨床の橋渡し. 発達心理学研究, 24, 439-448, 2013.

Anne, T. Validity and Reliability of the Index of Child Care Environment (ICCE), Public Health Frontier, 2(6), 2013. 査読有.

田中究, 精神科領域からの養育者支援(特集 親支援の現在—分離後の親支援に焦点をあてて). 子どもの虐待とネグレクト, 15(3), 301-307, 2013.

島義弘, 福井義一, 金政祐司, 武儀山珠実, 内的作業モデルと情動認知バイアス - 表情刺激に対する情動評価. 感情心理学研究, 21, 1, 28-36, 2013. 査読有.

〔学会発表〕(計 9 件)

Kitagawa, M., Iwamoto, S., Kazui, M., Kudo, S., Matsuura, H., & Umemura, T. What element of the Circle of Security program is effective for children with different attachment category? Symposium conducted at the 15th World Congress of World Association for Infant Mental Health, Prague (Czech), 2016. 査読有.

Mori, S. & Nishizawa, S. Reconsidering the recent development of Japanese residential care and the road to FICE Japan. FICE Kongress, Vienna (Austria), 2016.

久保信代, 北川恵. 自閉症スペクトラム児と養育者に対する関係支援—アタッチメントに基づく「安心感の輪」子育てプログラムに参加した 4 歳男児と母親の変化, 日本心理臨床学会, 第 35 回 秋季大会, パシフィコ横浜 (神奈川県, 横浜市), 2016.

北川恵. The Circle of Security Program と「安心感の輪」子育てプログラム, 第 16 回日本サイコセラピー学会シンポジウム 2 「親と子のこころを護るサイコセラピー」, 愛育病院 (東京都, 港区), 2015.

福井義一, 松尾和弥, 大浦真一. 虐待と愛着の内的作業モデルが表情の情動認知の反応時間に及ぼす影響, 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場 (愛知県, 名古屋), 2015.

Kitagawa, M., Iwamoto, S., Kazui, M., Kudo, S., Matsuura, H., Umemura, T. What element of the Circle of Security program is effective? Comparing the quality of parent-child relationship after parents received the psycho-education with after they reviewed the tape of themselves. the 14th World Congress, WAIMH, Edinburgh (UK), 2014. 査読有.

森茂起, 安梅勅江, 田中隆志, 張羽寧. 健やかな子育てのための環境評価と支援: 日本におけるサポートを必要とする子どもと保護者の支援. シンポジウム企画および発表発表題目 社会的養護に暮らす子どもたちの成長に関わる多要因: 子育て環境評価の意義と研究デザイン. ISPCAN, 名古屋国際会議場 (愛知県, 名古屋市), 2014.

Zhang, Y., Mori, S., Archer, M., & Lau, J. The Japanese jidoyogohisetsu study: Research Design and major findings of Japan's first systematic research on institutionalised children's mental health outcome. 14th World Congress, WAIMH, Edinburgh (UK), 2014.

Mori, S., Nishizawa, S., Lau, J., & Zhang, Y. Rearing Environment in Japanese Children's Institutions. FICE-International, Bern (Die Schweiz), 2013.

〔図書〕(計 5 件)

森茂起, 徳山美知代, 北川恵他. 「社会による子育て」実践ハンドブック. 岩崎学術出版社, 2016.

Zhang, Y., Fukui, Y., Mori, S. Japanese residential care in transformation: implications and future directions. *Residential Child and Youth Care in a Developing World*. The International Child and Youth Care Network Press.

2016.

海野千畝子(編著)子ども虐待への心理臨床, 病的解離・愛着・EMDR・動物介在療法まで. 誠信書房, 2015.

井出浩, 海野千畝子, 木村優子他. 子供たちを児童虐待から守るために, 養護教諭のための児童虐待対応マニュアル, 第5章性的虐待と理解と対応. 公益財団法人, 日本学校保健会, 33-34, 2014.

森茂起. 自伝的記憶の整理としての心理療法—トラウマ性記憶の扱いをめぐって—. 森茂起編, 自伝的記憶と心理療法. 平凡社, 12-41, 2013.

〔その他〕

森茂起, 張羽寧, 安梅勅江, 田中究, 海野千畝子, 北川恵他. 思春期前期 HOME 評価尺度実施マニュアル(養護施設版). 甲南大学人間科学研究所, 2016.

6. 研究組織

(1)研究代表者

森 茂起 (MORI Shigeyuki)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号: 00174368

(2)研究分担者

安梅 勅江 (ANME Tokie)

筑波大学・医学医療系・教授

研究者番号: 20201907

北川 恵 (KITAGAWA Megumi)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号: 90309360

福井 義一 (FUKUI Yoshikazu)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号: 20368400

田中 究 (TANAKA Kiwamu)

神戸大学・医学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号: 20273790